

臨床倫理学入門コース実施報告

京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター（CAPE）及び京大オリジナル（株）主催による、臨床倫理学に関する教育プログラム（臨床倫理学入門コース）を2023年8月8日と9月3日に開催しました。入門コースの実施は8回目で、参加者は全国から70名の受講生と、ファシリテーターと講師13名、京大オリジナルから事務局4名で実施しました。

1日目はオンライン形式で事例を紹介した後に小グループで意見交換をし、その後3週間の間にオンデマンドによる動画視聴をしてもらい、2日目は、対面とオンラインのハイブリッド形式でライブ授業を実施しました（受講生のうち、オンラインが41名、対面が29名）。

臨床倫理学コースの目的は、臨床で難しい事例に遭遇した人が、問題を適切に考えて対応できる技能を身につけ、現場で活動してもらうことです。課題の解決には、どこにどんな問題があり、その要因は何か、患者はどうあることがよいか、それを実現するのに必要な方策は何か、方策を達成するための戦術・技術は何か、を考えることが必要ですので、これらを講義や演習を通じて学べるように構成しています。入門コースでは、2つの事例（うら若き進行期のがん患者に、本人に黙って代替治療をやってほしいと親が望む事例と、回復不能な状態の患者が事前指示書にて生命維持治療の中止を希望している事例）を取り上げて、相談を受けた臨床倫理コンサルテーションチームとして、相談者にどのような助言を返すかを検討していただきました。

前回のセミナーから、事例を検討する際には「考える道筋」を構造化した方法に沿うことを求めており、マンダラチャートなるツールを用いて考えるように提案しています。マンダラチャートでは、関係する人の考えやその源泉となっている欲、感情、利益などを把握すること、そして、原則に基づいて患者の利益になる行為を考え、誰にどうアプローチするか、の戦術や言い方などの技術も考える、という段階を踏めるようになっています。

受講生のみなさんは、活発に意見を出して、熱心に議論し、戦術や技術までまとめていた班も多くありました。患者や家族、医療者それぞれの気持ちに配慮したり、相談者への支援策も立てたりした班もあり、このマンダラチャートは議論のお助けアイテムとして結構役に立つのではないかと感じました。

数年前までは、倫理コンサルが最終的に考えることを「患者に適切な方策は何か」として、「問題となっている治療をするのかしないのか」を判断することにしていました。しかし現在は、「患者はどうあることがよいか」を考えることに焦点を移しました。患者にどのような行為を行ったらよいかは、「患者本人がどうありたいと思っているのか」という、実存主義で言うところの「本来の自己」から導き出されるものであり、これが定まれば、治療をどうしたらよいかの判断がつけられるからです。患者の価値観を共有することは必須で、講義でも強調しているところですが、生き死にかかわることについては好き嫌いのレベルではなく、自身のありように基づいた判断が求められるため、それを確認することが何よりも必要だと思に至りました。

各班の事例検討の報告では、「患者には本人がよしとする人生を過ごしてもらうことを大事にしたい」という意見のほかに、「医療者の自尊心を傷つけないように配慮する」という気遣いがみられたり、「相談者が困らないようにコンサルが診療科に向いて関係者と話し合う」といったコンサル自身も汗を流す道を提案したりする班もありました。みなさんが現場に介入することで、風通しがよくなり、温かな空気の中で、緊迫した問題もほぐれていくに違いないと思いました。

また、セミナーの終了後は、gather という文明の利器を使ってオンラインでの意見交換会を持ち、コースの感想をお聞きしたり、現場での悩みや工夫をお聞きしたりして、楽しい時間を過ごしました。病院で倫理コンサルの仕組みを立ち上げたばかりの人や、これから立ち上げるという方もおられ、継続してさまざまなハードやソフトを提供することで支援できたらと思っております。本コースの受講生が立ち上げた「りんこん研究会」が倫理コンサルを支援すべく活動しておりますので、こちらにもご参加いただければ幸いです。

ハイブリッドでのコース実施は 2 回目でしたが、つつがなく実施することができ、参加してくださった受講生のみなさま、講師やファシリテーターのみなさま、そして、準備から運営まで細やかな気遣いをしてくださった京大オリジナルのみなさまのおかげと存じます。心より御礼申し上げます。

2023 年 9 月 9 日

佐藤 恵子